

修士論文（要旨）

2020年1月

中国人大学院留学生の WTC（コミュニケーション意欲）の変容
—学内外の参加に着目して—

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

217J3002

高宸

Master's Thesis(Abstract)

January 2020

Transformation of Chinese Graduate Students' WTC (Willingness to communicate): Focusing on participation in on-and off-campus

Chen Gao

217J3002

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Research Paper Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	動機付け研究の歴史	3
2.2	WTC研究の起源と発展	4
2.2.1	WTCの概念	4
2.2.2	WTCモデル	4
2.3	WTCに関する実証的研究	5
第3章	調査概要	8
3.1	調査方法	8
3.2	調査対象者のプロフィール	8
3.3	分析方法	9
第4章	学内での社会参加に対する分析	10
4.1	来日経緯	10
4.2	学内のフォーマル場面でのWTCの変容に影響する要因	11
4.3	学内のインフォーマル場面でのWTCの変容に影響する要因	14
4.4	WTCの維持と向上につながる方法	16
4.5	学内の社会参加全般に対する評価	18
第5章	学外での社会参加に対する分析	22
5.1	学外のフォーマル場面でのWTCの変容に影響する要因	22
5.2	学外のインフォーマル場面でのWTCの変容に影響する要因	23
5.3	WTCの維持と向上につながる方法	26
5.4	学外での社会参加全般に対する評価	29
第6章	学内での社会参加に対する考察	32
6.1	来日経緯	32
6.2	学内のフォーマル場面でのWTCの変容に影響する要因	33
6.3	学内のインフォーマル場面でのWTCの変容に影響する要因	34

6.4 WTC の維持と向上につながる方法	36
6.5 学内での社会参加全般に対する評価	37
第7章 学外での社会参加に対する考察	40
7.1 学外のフォーマル場面での WTC の変容に影響する要因	40
7.2 学外のインフォーマル場面での WTC の変容に影響する要因.....	40
7.3 WTC の維持と向上につながる方法	42
7.4 学外での社会参加全般に対する評価	43
7.4.1 肯定的評価.....	43
7.4.2 否定的評価.....	44
第8章 総合的考察.....	46
8.1 学内外の社会参加において WTC の変容に影響を与えた要因.....	46
8.1.1 「対グループへの態度」、「対グループの接触動機」、「対人接触動機」	46
8.1.2 「コミュニケーション・コンピテンス」、「自信」	47
8.1.3 「その場の社会的状況の認知」	48
8.1.4 「達成困難な目標設定」	48
8.1.5 「日本語学習者から日本語使用者への変容」	49
8.2 WTC の維持と向上に必要なもの	49
8.2.1 学校側の支援.....	49
8.2.2 留学生の努力と工夫	50
8.2.3 日本人学生の異文化交流を柔軟に受け入れる姿勢.....	51
第9章 まとめと今後の課題	52
参考文献.....	I
添付資料.....	a
インタビュー項目（日本語版）	a

近年の急速なグローバル化に伴い、日本へ留学する学生が年々増えている。留学生である彼らにとって、コミュニケーションのために第二言語である日本語を用いるということは、他者に対して自己を表現し、他者と相互交渉を持ちつつ自己を変革するプロセスを開始することと言える(八島 2003)。しかし、学習者の第二言語コミュニケーションへの動機づけ、すなわち第二言語における Willingness to Communicate (コミュニケーション意欲、以下、WTC と略す) を左右する理由は複雑で、中には WTC が低下する学生も数多く存在する。このような観察に基づき、学習者個人の学習や仕事の経歴に着目し、学習者の WTC の変容および変容の要因を探求する実証的研究が喫緊の課題であると考えた。

そこで、本研究では、中国人大学院留学生を調査対象者とし、彼らの入学時から現在まで学内外での社会参加を総合的に分析・考察することを目的とし、研究課題として以下の3つを設定した。

1) 中国人大学院留学生が学内で社会参加する際に、彼らの WTC の変容に影響を与える要因は何か。

2) 中国人大学院留学生が学外で社会参加する際に、彼らの WTC の変容に影響を与える要因は何か。

3) 中国人大学院留学生が自らの WTC を維持・向上するのに必要なものは何か。

まず、WTC に関する先行研究を概観し、教室内外における実際使用場面のコミュニケーションの意欲に着目した質的研究が極めて乏しいことに気づいた。そこで、稿者は大学院留学生の学内外での社会参加を総合的に分析し、WTC の変容に影響を与える要因について研究していきたいと考え、調査協力者 8 名に対し、一人 40 分から 1 時間の半構造化インタビューを行い、質的データ分析法(佐藤 2008)および「WTC モデル」(MacIntyre et al. 1998)を用いて分析、考察を行った。

調査の結果、大学院留学生は進学する前に、さまざまなコンテンツを通して、日本語、日本文化に触れ、それを自ら体験したい、日本人と友達になりたいという気持ちをもって日本に留学したことがわかった。進学後、彼らは学内で社会参加をする際に、学術日本語能力を身に着け、自信の喪失と再構築を繰り返し経験し、日本人と友人関係を築き、さまざまな面で成長したと同時に、「学内で日本人と交流する機会が少なかった」という不満も持っていることがわかった。一方、学外で社会参加する場合、「日本語学習者」から「日本語使用者」になった彼らは自らのニーズに合う社会参加に選択的に参加し、多様な実際コミュニケーション場면을体験し、新たな人間関係を構築し、コミュニケーション能力の向上を実感したことがわかった。この一連のプロセスの中で、多種多様な困難に直面した大学院留学生は WTC を維持し、向上させるために、自らの努力と工夫を重ねたと同時に、学校からの支援および日本人学生の協力も重要な役割を果たしていたことがわかった。

この結果を踏まえ、総合的に考察した結果、学内外での社会参加において、WTC の変容に影響を与えた要因は以下の 8 つであることが明らかになった。

- ・「対グループへの態度」
- ・「対グループの接触動機」
- ・「対人接触動機」
- ・「コミュニケーション・コンピテンス」、

- ・「自信」
- ・「その場の社会的状況の認知」
- ・「達成困難な目標設定」
- ・「日本語学習者から日本語使用者への変容」

また、大学院留学生の WTC を維持・向上するのに必要なものは以下の 3 点であることが解明された。

- ・「留学生の努力と工夫」
- ・「学校側の支援」
- ・「日本人学生の異文化交流を柔軟に受け入れる姿勢」

今後の課題としては、多人数の大学院、または学部留学生の一年から卒業までの社会参加を縦断的に調査することを挙げたい。また、中国人だけではなく、非漢字圏留学生を対象とする WTC の実証的研究も必要があると思われる。留学生が大学内外でより充実した学習生活を過ごせるようするには、さらなる研究が望まれる。

- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 野原美和子 (1999) 「学習者の自発的発話を導く教師の支援的言動—積極的な自発的発話の場合—」『世界の日本語教育』9, pp.101-113.
- 浜脇一菜 (2004) 『日本語教育における Willingness to communicate と対人感情に関する基礎的研究—外国語指導助手を対象として—』2004年度広島大学大学院修士論文.
- 八島智子 (2003) 「第二言語コミュニケーションと情意要因「第二言語不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察」『外国語教育研究』5, pp.81-93.
- Chan, B., & McCroskey, J.C. (1987). The WTC scale as a predictor of classroom participation. *Communication Research Reports*, 4, pp.47-50.
- Hshimoto, Y. (2002). Motivation and willingness to communicate as predictors of reported L2 use: the Japanese ESL context. *Second Language Studies*, 20, pp.29-70.
- MacIntyre, P.D. (1994). Variables underlying willingness to communicate: A casual analysis. *Communication Research Reports*, 11(3), pp.135-142.
- MacIntyre, P.D., Baker, S.C., Clément, R., & Donovan, L.A. (2003). Talking in order to learn: willingness to communicate and intensive language program. *The Canadian Modern Language Review*, 59, pp.589-607.
- MacIntyre, P.D., & Charos, C. (1996). Personality, attitudes, and affect as predictors of second language communications. *Journal of Language and Social psychology*, 5, pp.3-26.
- MacIntyre, P.D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, pp.545-562.
- McCroskey, J.C. (1992). Reliability and validity of the willingness to communicate scale. *Communication Quarterly*, 40, pp.16-25.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.
- Yashima, T., Zenuk-Nishide, L. & Shimizu, K. (2004). The Influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, 54, pp.119-152.